

書評

資料によって、相手が何を考えていたのか 理解でき、様々な解釈ができる

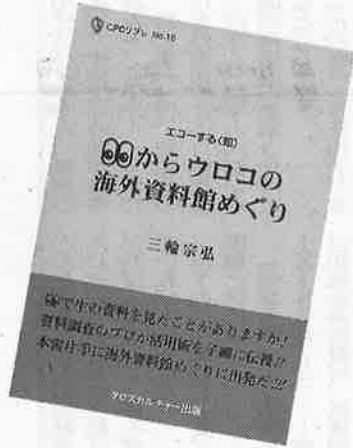
図書館で資料調査するのに、役立つような情報を記載

村木 哲

三輪宗弘 著

60からウロコの海外資料館めぐり

6・30刊 A5判172頁 本体1800円
クロスカルチャー出版



わたしは、かつてといって三十年前のことになるが、江藤淳(一九三二〜一九九〇)の著書『閉ざされた言語空間』(文藝春秋刊、一九八九年)に接して、そこで次のように記されていたことのある種の驚きを感じたことをいまだによく覚えている。

「昭和五十四年秋から、昭和五十五年春にかけての約半年間、私は、ワシントンの中心部に在るウィルソン研究所(略)から、メリーランド大学付属マッセルティン図書館(略)と、ストランドの合衆国立公文書館分室(略)に、数日置きに交互に通うという日課を繰り返していた。」

私は、九カ月間と限られたワシントン滞在中に、日本占領中米占領軍が行った新聞、雑誌等の検閲の実体を、できるだけ明らかにしたいと考えた。

帰国後、直ぐに刊行した『一九四六年憲法―その拘束』(文藝春秋刊、一九八〇

年)という著書がある。それは、戦後の新憲法の成立過程に占領軍(アメリカ国家)の意向が大きな影響力としてあったことを示されていたのだが、まさしく、そのことと繋がっている。わたしが驚いたのは、江藤淳ほどの優れた批評家が、戦後占領下でのアメリカ支配を傍証するために、公開されている公文書を丹念に調べていく齎力をなんとなく空しく感じたからだ。

さて、本書は「資料館に中心のある学生及び一般の方が海外アーカイブや図書館で資料調査するのに、役立つような情報を記載した」(はしがき)もので、全三章(Ⅰ

アメリカのアーカイブ、Ⅱヨーロッパ、Ⅲ オセアニア・アジア)で構成している。著者が初めて海外の資料館を訪れたのは、驚くことに「ワシントンDCの米国立公文書館ストランド分館」だった。しかし、「狙った資料がなかなか出てこなかったことを思ひ出す」(「同前」と述べている。

本書では、入館から閲覧の手続き、資料のコピーや撮影の可否などを細かく示しながら、さらには、昼食の場所、交通機関、宿泊の場所などが記載されている。わたしが注目したのは、それぞれの地域の古書店も紹介していることだ。確かに、五十年、七十年といった時間を射程にしているのは、関連する刊行書は、新刊書店ではなく、当然、古書店ということになる。

例えば、「DCの古本屋情報」として「Second Story Booksを次のように記述している。

「Dupont Circle店の他に、郊外にも大きな倉庫があり、そこでは朝から晩まで古書とにらめっこできる。アメリカ史、軍事史、理科系の本などありとあらゆるものが並んでいる。(略)アーカイブが開館の日曜日、ここで本三昧である。」

ところで、問題がないわけではない。米国議会図書館では、「予算カット、人員削減の猛吹雪がブッシュ政権、オバマ政権の時代に吹き荒れた」という。「専門職が米国図書館のやり方であったが、人手不足で様々な職を掛け持ちしなければならぬ」

り、組織の統合が進んで、「世界の知の宝庫がこんなことでいいのだろうか」と疑義を呈している。

(博物館)を二つだけ取り上げてみたい。

「展示されている写真には、撮影者、場所、日時が書かれていない。(略)浮島丸の機雷接触事故が故意に起こされたとする展示など、根拠を示し、信憑性の裏付けを示すべきだ。国立の博物館とは思えないプロパガンダの展示になっている。(韓国・国立日帝強制動員博物館、二〇一五年十二月開館)

徴用工問題で確執が再燃する日韓の対立、わたしたちは、冷静に視線を差し込んでいくべきだ。

本書の最後(あとがき)で著者は次のように述べる。「資料がなければ、イデオロギーだけの歴史解釈に陥ってしまう。資料によって、相手が何を考えていたのか理解でき、様々な解釈ができることがわかるであろう。」

もちろん、いまなら「イデオロギーだけの歴史解釈に陥る」とは理解できる。そして、ひとつの考え方、あるいはアプローチの仕方があるとして、「二次資料の重要性があることは、わかっているつもりだ。だから四十年前の江藤淳がアメリカ、ワシントンの資料館に通いつめて行ったことの意義を、いまのわたしは、敬意を表する思いしかない。」

(評論家)